

「あなたを放っておけない」

(ルカの福音書 2 章 1 節～ 20 節)

「きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです」 (2:11)

仲森文穩

今日のメッセージ要旨

○ヨセフとマリアは、ローマ皇帝の勅令により登録を強いられて、ナザレからベツレヘムへ旅立ちました。マリアは身重の身、いつ産気づくか分かりません。でもそこは信仰者のこと「大丈夫、きっと神様が守ってくださる」と、一切を神様の御手に委ねて二人は出発したのでしょうか。

私にも似た体験があります。臨月の妻を姫路に置いて、初任地の長野の教会に旅立ちました。後ろ髪を引かれる思いでしたが「大丈夫、きっと神様が守ってくださる」と信じて出発しました。10日後母子ともに健康との知らせを聞き、祈りが聞かれたと感謝しました。皆さんも「大丈夫、きっと神様が守ってくださる」という思いを強く信じ、人生を歩んで来られた経験があることでしょうか。

強いられたベツレヘム行きですが、救い主はベツレヘムに生まれるというミカの預言が成就します。私たちの人生を握っておられるのは神様です。だから人生は面白い。見えているようで見えていないことがある。「ああ、こんなところにも神様の守りがあったのか」と、後で分かたりします。人生を歩む中でまだ見せてもらっていないものを見せていただくという驚きや喜びに出逢う度に、イエス様と共に生きるって本当にすばらしいと実感します。

○クリスマスの夜は奇跡の連続です。野辺の羊飼いたちに天使が現れ、救い主の誕生を告げたのも、その一つです。ユダヤの宗教指導者たちにとっては、地団太ふむようなあり得ない話です。羊飼いは羊の世話にかまけて安息日も守りません。ユダヤ人の意識では、律法を守れるか守れないかが重大でした。それは同時に、差別や偏見を生む温床ともなっていました。誕生からおよそ30年後、イエス様はガリラヤで宣教活動を始められました。

「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である」と語り、その慈愛のまなざしは罪に悩む人、病気や障碍によって社会から疎外されている人、律法を守れないために神様の救いから締め出されている人々に向けられていました。そもそも貧しい飼いや葉桶に誕生されたことが、すでにその象徴でした。

イエス様は、律法によって人を判断することはされず、また律法によって救われるのではない、と説いて回りました。その結果、律法学者やパリサイ人から律法やぶりと罵られ、また神殿を冒瀆したと祭司長たちから訴えられたのです。

イエス様の願いは、天国の門は律法を守るエリートたちのみならず、万民に開かれていると教え、神の御心はどんな人も放っておけない愛に満ちていると示すことでした。来たる25日はクリスマス礼拝です。羊飼いたちが救い主の到来の知らせを聞いて喜び、人々に告げて回ったように私たちも感謝と喜びをもって、友人知人を教会にお誘いしようではありませんか。